

本屋に行くのが好きだ。新宿に行くときは必ず大きな本屋に行って、大学で専攻した社会学の現在の地平を確かめるために、売り場に並べられた本を眺めては、誰が基本書を書き、どんな最新の社会問題があるのかを確認している。売り場には、時代を超えて読み継がれた代表的な良書や現在到達した学問の高みを見せてくれる本が、書店員の努力と思いと視点によって並べられている。こういう分野の本が欲しいと漠然と探しに行っても探すことができる。本屋で丹念にタイトルと目次と中身を見るとはずれることはほとんどない。ネットで一律に濃淡もなくただ並べられた本をタイトルと目次を頼りに買っても、タイトルの見掛け倒しに終わることが多いので、できるだけ本屋に行くようにしている。

本屋の仕掛けを、2週間の大手書店への派遣研修で確かめる機会があった。子どものころから慣れ親しんだカラフルな文庫カバーをかけることから始まり、どんな大きさの本も手際よく客の前でカバーをかけられるように練習した。そして、売り場にかける書店員の努力を知った。

書店員はアルバイトの方も含めて仕入れを任せられており、「売れた本は必ず補充する」「約3か月売れなかった本は返品する」「どの本を平積みにもどの本をどの高さに並べどうアピールするかを考える」「売れる本だけでなく売れてほしい本も日ごろの情報収集を活かして仕入れる」「新聞の書評や広告に載った本は適宜発注する」「売れ筋のデータを毎日把握する」というような地道な努力の積み重ねであることがわかった。よく売れる本といっても一日に一冊売れるかどうかという、一日というマイクロな単位でみるととても大したことではないのだが、そうしたマイクロレベルでのニーズの把握の積み重ねがいかに大事であるかを痛感した。

本屋のおかげで、たった一冊だけで平積みになっていたル・グウィン「暇なんかないわ 大切なことを考えるのに忙しくて」にも出会うことができた。

本に出会うために、本と恋に落ちるために、本屋へ行きたい。本屋がなくならないでほしい。